

平成25年度 研究成果発表会プログラム

開会		10:00
1	『高木間植栽に適した街路樹用樹木の選定』 ～街路樹100万本計画の実現に向けて～	緑化森林科 長嶋 大貴 10:05 ～ 10:20
2	『紫外線除去フィルムがトマトの農薬残留に及ぼす影響』 ～都内産施設トマトの安全性の確認について～	生産環境科 林 裕美 10:20 ～ 10:35
3	『ヒマワリの量的施肥技術』 ～生育に見合った施肥でコストを削減します～	園芸技術科 小幡 彩夏 10:35 ～ 10:50
4	『ブバルディア・ウイルスフリー苗の増殖効率の向上を目指して』 ～培養苗の生育と発根に及ぼす内生菌の影響～	園芸技術科 鈴木 克彰 10:50 ～ 11:05
5	『多摩の森林におけるシカの生息域をさぐる』 ～シカはどこにいて、どんな森林被害を及ぼしている？～	緑化森林科 新井 一司 11:05 ～ 11:20
6	『東京うこっけいの生産性向上と高付加価値化のための技術開発』 ～烏骨鶏の謎に迫ります～	畜産技術科 小嶋 禎夫 11:20 ～ 11:35
7	『魚加工品に含まれるアレルギー原因物質の測定』 ～魚醤油・くさやに含まれるパルプアルブミンを定量します～	食品技術センター 伊藤 康江 11:35 ～ 11:50
休憩		11:50 ～ 13:10
8	『ニホンナシ新品種「凜夏・甘太」の特性』 ～都内での導入が期待される食味に優れた早生・晩生品種～	園芸技術科 河野 章 13:10 ～ 13:25
9	『東京都の野菜畑土壌の実態』 ～土壌の理化学的性質の経年変化～	生産環境科 松浦 里江 13:25 ～ 13:40
10	『野菜の有望品種を紹介します』 ～キャベツ、ブロッコリー、ダイコン、トマトのおすすめ品種～	園芸技術科 沼尻 勝人 13:40 ～ 13:55
休憩		13:55 ～ 14:00
特別講演 『東京ならではの農産物販売の可能性を探る』 法政大学キャリアデザイン学部准教授 酒井 理 氏		14:00 ～ 15:00
休憩		15:00 ～ 15:15
11	『コマツナに発生するリゾクトニア病』 ～胞子による急速な発生拡大の可能性～	生産環境科 菅原 優司 15:15 ～ 15:30
12	『切り花パンジーとは』 ～江東地域から新しい春の切り花品目を提案します～	江戸川分場 上原 恵美 15:30 ～ 15:45
閉会		15:45

特別講演 『東京ならではの農産物販売の可能性を探る』 ～大都市における多様なマーケティング戦略～

法政大学キャリアデザイン学部准教授 酒井 理 氏

東京などの大消費地を背景に営まれている都市農業において、消費の多様かつ高度なニーズに応えつつ、生産者が自信をもって生産した農産物に関する情報を、どのようにして発信すれば消費者や実需者の購買行動に結びつけることができるか、最新のマーケティング論に基づいてわかりやすくお話していただきます。

＜酒井 理（さかい おさむ）氏 プロフィール＞
1965年三重県生まれ。1990年立教大学社会部卒業。同年から東京都産業労働局で中小企業診断や地域産業政策の企画立案等に携わる。その間、法政大学大学院社会科学部研究科経営学専攻修士課程修了。2005年より大阪商業大学総合経営学部専任講師及び准教授。2012年より現職。専門は、マーケティング論、消費者行動論等。著書として「有機農産物の流通とマーケティング」や「サービス産業の構造とマーケティング」などがある。



No. 1 『高木間植栽に適した街路樹用樹木の選定』
～街路樹 100 万本計画の実現に向けて～

長嶋大貴（緑化森林科）

〔発表内容〕

東京の街路では新たに街路樹を植栽するスペースは限られているため、高木と高木の間に樹高が低めの中木を植栽する「高木間植栽」が行われています（写真1）。高木間は高木や近隣の建物などにより太陽光が遮光され、10%～40%程度の低照度条件になっている場所が多くみられます。そこで、高木間植栽に適した樹種として、低照度条件下でも葉の枯れや枝の徒長などの観賞性への影響が現れにくい中木の選定を行いました。その結果、ニオイヒバ「スマラグ」、サカキ「バリエガータ」（写真2）、ソヨゴ「ハラシマ」、カラタネオガタマ「ポートワイン」が低照度下の植栽に適しており、高木間植栽に有望な樹種であることがわかりました。これらの樹種は表1に示したような特徴を持っており、都市景観に新しい魅力を与えてくれます。「2020年の東京」の目標の一つである街路樹100万本計画の達成に向け、低照度条件でも植栽が可能なこれらの樹種が活躍します。

〔図表等〕



写真1 都道における高木間植栽



写真2 高木間植栽に有望な樹種

表1 高木間植栽に有望な樹種の特徴

樹種名「品種名」	特徴
ニオイヒバ「スマラグ」	細長い樹形が美しく、葉が芳香を放つ品種。
サカキ「バリエガータ」	葉の外側に入った黄色い斑が明るさをもたらしてくれる品種。
ソヨゴ「ハラシマ」	枝が横に広がらないタイプ、秋から冬にかけて赤く美しい実がなる立川の生産者が選抜した品種。
カラタネオガタマ「ポートワイン」	5月頃咲く花にはバナナに似た強い芳香があり、花びらの縁が特に赤くなる赤花品種。

No. 2 『紫外線除去フィルムがトマトの農薬残留に及ぼす影響』

～都内産施設トマトの安全性の確認について～

林 裕美（生産環境科）

〔発表内容〕

ハウス栽培での総合的病害虫管理（IPM）の主要技術として紫外線除去フィルム（以下除去フィルム）の利用があります。しかし，これまでの研究は，紫外線除去が作物に及ぼす影響や耐久性確認が中心で，除去フィルムの使用が作物への農薬の残留におよぼす影響についての知見は十分ではありません。そこで，実際にトマトに農薬を散布し，農薬の減衰におよぼす影響を調査しました。

トマトは大玉品種（桃太郎ファイト）と中玉品種（フルティカ）を栽培し，農薬は，ペルメトリン，マラソン，TPN，エトフェンプロックスの4剤（表1）を使用し，日数の経過と残留濃度の変化について調査しました。また，中玉品種のうち，農薬取締法上ミニトマトとされる直径3cm未満のものは分けて分析しました。

結果は，大玉品種と中玉品種共に，紫外線除去フィルムを使用しても，農薬の残留が普通のフィルムと差がなく，トマトの登録内容に従って使用すれば安全なことが確認できました（図1）。

〔図表等〕

表1 薬剤の施用条件

成分名	商品名	成分量 (%)	希釈濃度 (倍)	使用量 (L/10a)	使用前 日数	使用 回数	残留基準値 (ppm)
マラソン	マラソン乳剤	50.0	2000～3000	100～300	1	5	0.5
ペルメトリン	アディオン乳剤	20.0	2000～3000	100～300	1	3	1
TPN	ダコニール1000	40.0	1000	100～300	1	4	5
エトフェンプロックス	トレボン乳剤	20.0	1000	100～300	1	2	2

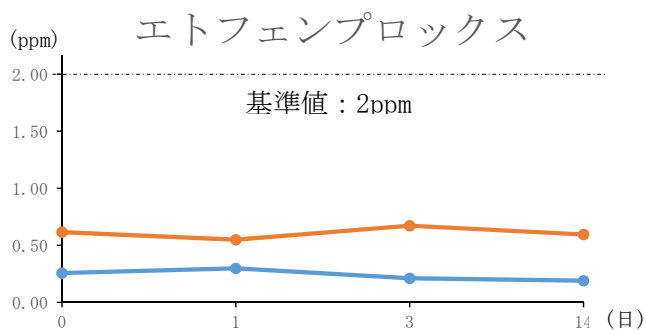
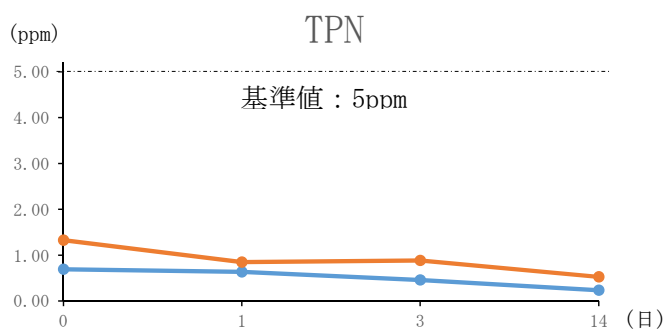
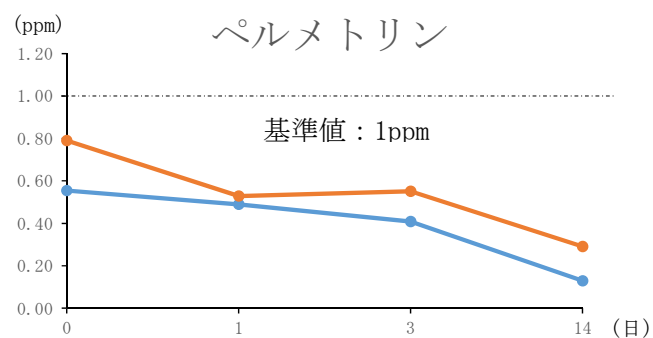
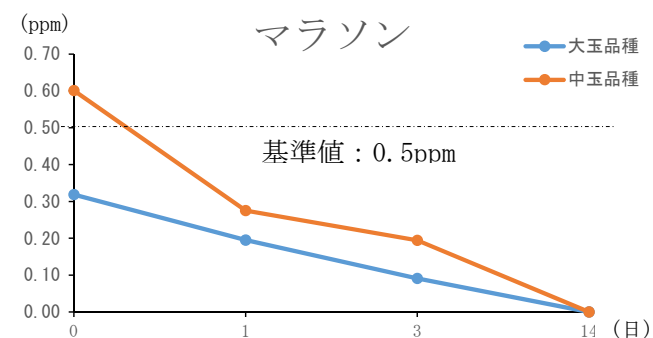


図1 除去フィルムを使用したハウスでの半促成栽培における農薬の濃度変化

No. 3 『ヒマワリの量的施肥技術』

～生育に見合った施肥でコストを削減します～

小幡彩夏（園芸技術科）

〔発表内容〕

近年、重油や資材価格が高騰しており、生産コストの低減が必要とされています。また、花卉栽培においても環境保全の関心が高まっており、硝酸態窒素汚染など環境負荷の低減が求められています。これらの生産コスト及び環境負荷低減のため、点滴灌水を用いた量的施肥技術を応用した施肥低減技術を開発しました。

ヒマワリを使用し、各実験の試験区を表1のとおりにしました。実験1では生育ステージごとの養分吸収パターンを明らかにし、実験2ではそれを基に量的施肥を行いました。実験3では、排液量から灌水量を自動制御するシステム（FBシステム）の開発を行いました。

その結果、養分吸収パターンから肥料が必要とされる着蕾直前に集中的に施肥を行うことで、生育や開花時期をほぼ変えずに、栽培全体の施肥量を24%削減することが可能でした（図1、表2）。また、FBシステムは硝酸態窒素汚染対策に適応できることがわかりました（図2）。

〔図表等〕

表1 試験区の設定

実験名	目的	播種日	処理開始日	試験区	総灌水量 (mL/鉢・日) ^a	処理開始後週数 (週)				
						1	2	3	4	5
1	ヒマワリにおける養分吸収パターンの解明	4月11日	5月1日	少量区①	200～450	2	2	2	2	2
				中量区①		4	4	4	4	4
				多量区①		8	8	8	8	8
2	実験1を基に適切な施肥体系の確立	8月15日	9月5日	少量区②	200～350	2	2	8	2	-
				中量区②		4	4	8	4	-
				多量区②		8	8	8	8	-
3 ^b	硝酸態窒素汚染対策として排液量の少ない栽培システムの確立	10月10日	11月12日	対照区	0.2L/鉢・日 (タイマー灌水)	4	4	4	4	4
				FB区	排液量が1日0.2Lになるよう灌水					

a) 総灌水量=液肥+水とし、液肥の量は常に固定した量を与え、水は生育や天候によって変更した。

b) 実験3は実験開始時点で着蕾していた

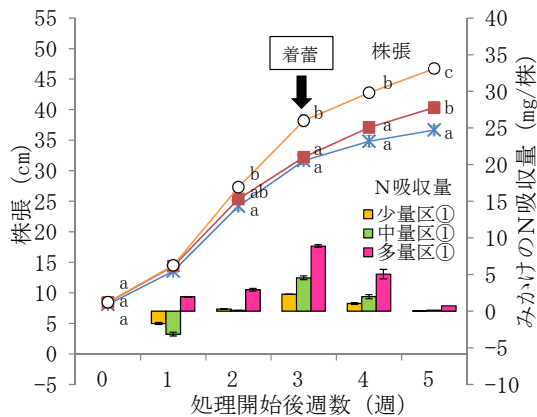


図1 異なる施肥量が生育および吸収量に及ぼす影響（実験1）

※少量区(□)，中量区(■)，多量区(○)を表す。

表2 異なる施肥量が各器官に及ぼす影響（実験2）

実験2	葉			茎			花			到花日数 (日)	栽培期間の全施肥量 (mg/株)
	新鮮重 (g)	乾物重 (g)	面積 (cm ²)	新鮮重 (g)	乾物重 (g)	茎径 (mm)	新鮮重 (g)	乾物重 (g)	花径 (cm)		
少量区②	5.3a	0.8a	260.2a	8.0a	1.5a	4.5a	6.2a	1.0a	8.7a	60b	58 (25) *
中量区②	11.2b	1.6b	555.3b	14.2b	2.6b	5.7b	12.2b	1.8b	10.9b	57a	176 (76)
多量区②	13.9c	1.9b	609.7b	16.8b	2.7b	6.0b	12.6b	1.9b	10.7b	58a	232 (100)

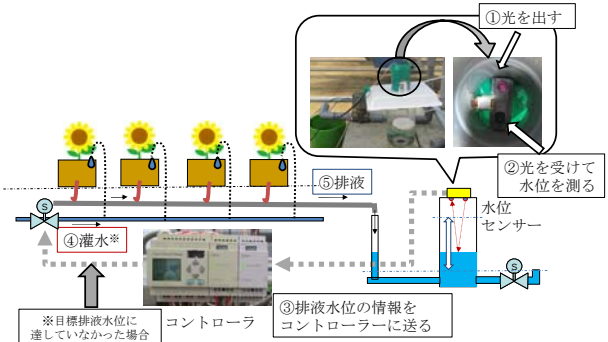


図2 FBシステム図

No. 4 『ブバルディア・ウイルスフリー苗の増殖効率の向上を目指して』
～培養苗の生育と発根に及ぼす内生菌の影響～

鈴木 克彰（園芸技術科）

〔発表内容〕

伊豆大島で栽培が盛んな切り花ブバルディアは（図1）、栽培にウイルスフリー苗を利用しますが、培養中の増殖率が低く、十分な苗数を生産できないことが課題です。そこで、原因究明と増殖率向上を目指して研究を開始しました。

まず、ブバルディアを培養すると、培地中に白濁が生じることを発見しました（図2）。この白濁は *Rhodanobacter* 属の内生菌であり、大島のブバルディアはこの菌に感染していることが判明しました。そこで、この内生菌に感染している“感染苗”と、感染していない“無菌苗”について、増殖率などを比較しました。すると培養中は、無菌苗のほうが感染苗よりも成長が優れ、増殖率が高いことが分かりました（図3）。一方、培養後に挿し木を行うと、感染苗のほうが無菌苗よりも発根率が高く、成長が優れていました（図4）。

以上の結果から、内生菌に感染していない無菌苗を選んで培養すれば増殖率が高まることが分かりました。また、発根率は感染苗のほうが高かったことから、挿し木の際に内生菌を活用することも今後検討したいと考えています。

〔図表等〕



図1 大島のブバルディア基幹品種の花
(左)チェリーピンク, (右)ヨホホワイト

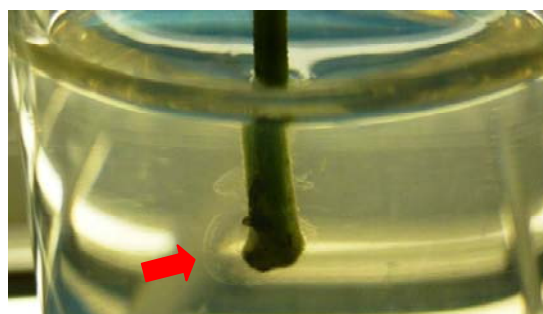


図2 培地中に出現した内生菌
矢印で示した白濁が内生菌

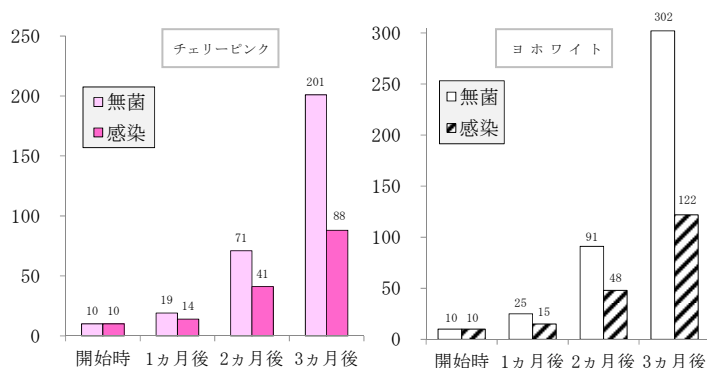


図3 感染苗と無菌苗の増殖率
3ヵ月間増殖させたところ、無菌苗の本数は感染苗の2.3～2.5倍になった。

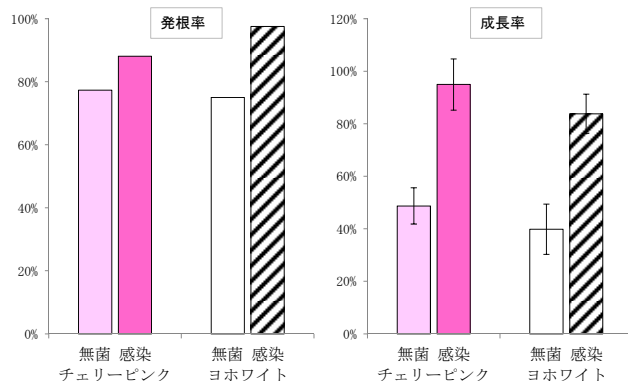


図4 感染苗と無菌苗の発根率と成長率
2品種ともに発根率と成長率は、感染苗のほうが無菌苗よりも高かった。

No. 5 『多摩の森林におけるシカの生息域をさぐる』

～シカはどこにいて、どんな森林被害を及ぼしている？～

新井一司（緑化森林科）

〔発表内容〕

東京都は、花粉症対策としてスギ人工林を伐採し、少花粉スギ、ヒノキ、広葉樹の苗木を植栽するスギ花粉発生源対策事業に取り組んでいます。一方、伐採後、明るくなった造林地では、ニホンジカ（以下、シカと略す）が植物を採食し、森林被害が生じることが知られています。しかし、都内のシカの生息実態については、わかっていません。そこで、シカの糞粒数調査から造林地に生息するシカの頭数を推定し、分布図を作成しました（図1）。2011年時点で、シカは青梅市や八王子市といった多摩の森林の東南部まで生息域を拡げていました。さらに2012年には、多摩の森林の東南部で生息密度が高まり、シカは生息域を急速に拡大することが明らかになりました。同時にセンサーカメラなどによる被害調査を行ったところ、シカによる苗木の葉の食害はほとんどみられませんでしたが、一方、幹の皮が剥がされる剥皮害が確認され、その時期は10月に集中していました。この被害は、オスジカの角こすりであることがわかり（図2）、今後のシカ被害対策に活用していきます。

〔図表等〕

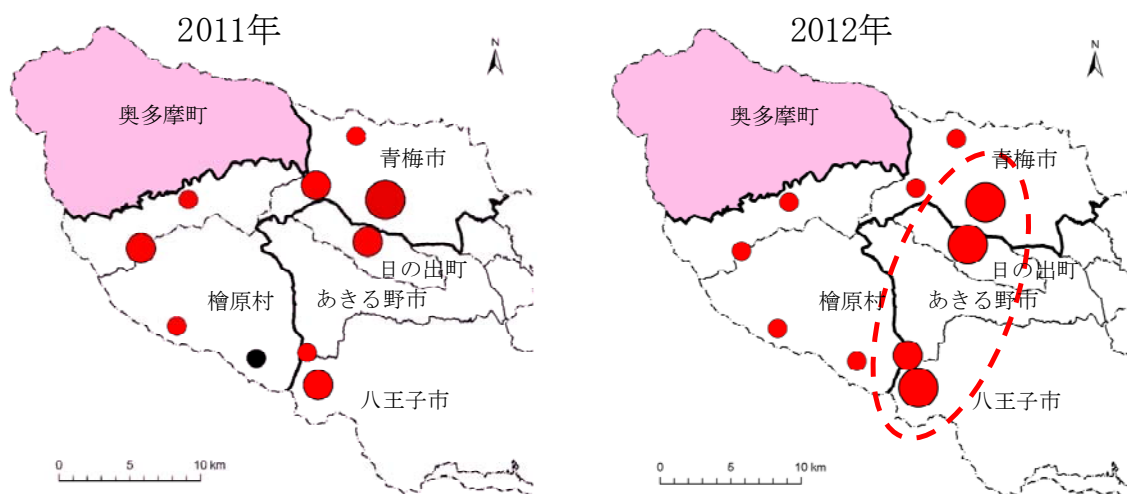


図1 再造林地のシカ生息密度分布の変化（●:0.0 ●:0.1-0.9 ●:1.0-4.9 ●:5.0- 頭/ha）
※ 奥多摩町のピンク色のエリアは、シカが低密度になるまで伐採を自粛している。



図2 オスジカによる角こすりの様子 左の健全なスギが1分間で右の状態に剥皮されました。

No. 6 『東京うこっけいの生産性向上と高付加価値化のための技術開発』
～烏骨鶏の謎に迫ります～

小嶋 禎夫（畜産技術科）

〔発表内容〕

「東京うこっけい」（図1）は、当センターが遺伝的な改良により、年間産卵数を当初の1羽あたり約80個から200個に高めた高産卵系烏骨鶏であり、毎年約1万5千羽の採卵用ヒナを農家等へ配布しています。中国の本草書「本草綱目」によれば、烏骨鶏の卵や肉には薬効があるとされ、中国や韓国では古くから薬膳料理に利用されてきましたが、わが国ではその食文化がなく、採卵を終えた個体はほとんど廃棄されていました。そこで、養鶏農家の収益向上をめざし、平成20年度から東京うこっけいの肉利用の研究に取り組みました。その結果、原料となる肉質の改善技術を究明するとともに、食品技術センターや都内食品加工メーカーとの共同研究により、「東京うこっけいハム」を開発することができました（図2）。また、烏骨鶏肉の機能性解明の研究では、疲労回復や老化防止に効果があるとされている「カルノシン」の含量が、東京うこっけいでは、一般の鶏肉の2倍あること、また、烏骨鶏肉のスープでは、抗酸化力が一般の鶏肉と比べ、ムネ肉で2倍、モモ肉で4倍あることがわかりました（図3）。

今後は、「東京うこっけい」が保有する機能性のさらなる解明や、機能性を最大限に発揮する飼養技術開発などに取り組んでいきます。

〔図表等〕



図1 東京うこっけい
（左：雄，右：雌）



図2 東京うこっけいハム

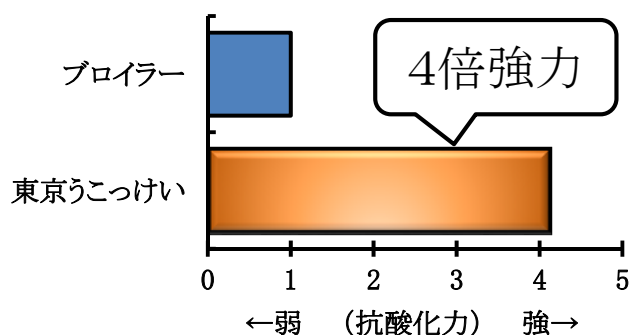


図3 抽出液（スープ）の抗酸化力

No. 7 『魚加工品に含まれるアレルギー原因物質の測定』

～魚醤油・くさやに含まれるパルブアルブミンを定量します～

伊藤康江（食品技術センター）

〔発表内容〕

1. 魚醤油・くさやに用いられる魚種のアレルゲン定量法の新規確立

パルブアルブミンを定量する方法としてはELISA(エライザ)法があります。これは、パルブアルブミンと特異的に結合する「抗体」を用いる方法です。しかし、パルブアルブミンは魚種ごとに構造が異なるため、各魚種の様々なパルブアルブミンに同様に結合する抗体を選ぶことが必要となります。そこで、3種の抗体を検討した結果、「魚醤油」、「くさや」に利用される魚種（写真1：ゴマサバ、トビウオ、ムロアジ）のパルブアルブミンの定量には、市販の「抗コイパルブアルブミンモノクローナル抗体」が適していることがわかりました。

2. 魚を魚醤油に加工するとパルブアルブミンはほぼ分解する

ゴマサバ、トビウオ、ムロアジを各原料魚として、乾燥麦麴を用いて作製した諸味（仕込み当日、仕込み後1ヵ月、2ヵ月）および魚醤油中のパルブアルブミン量は、3魚種いずれも仕込み当日に最も高く、その後減少し、魚醤油では3魚種いずれもアレルギー反応をほぼ誘発しない量にまで減少しました（図2）。

3. ムロアジをくさやに加工してもパルブアルブミンは減少しない

くさやは「くさや液」という様々な微生物が存在する液に一晩漬け込み製造します。微生物の作用によりパルブアルブミンが分解するのではないかと考え調査したところ、ムロアジのくさや加工品には、パルブアルブミンが残存していました（図3）。

〔図表等〕



写真1 魚醤油またはくさやに利用される魚種

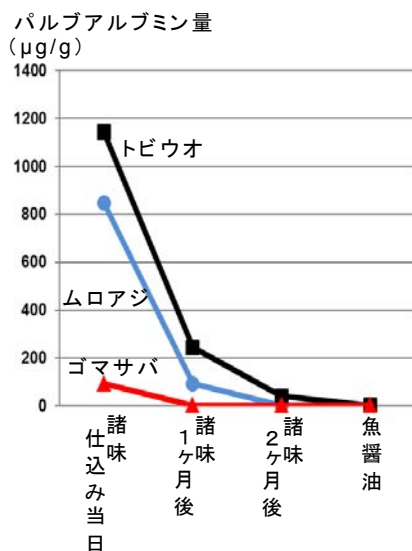


図2 トビウオ、ムロアジ、ゴマサバを原料魚とした諸味および魚醤油中のパルブアルブミン量

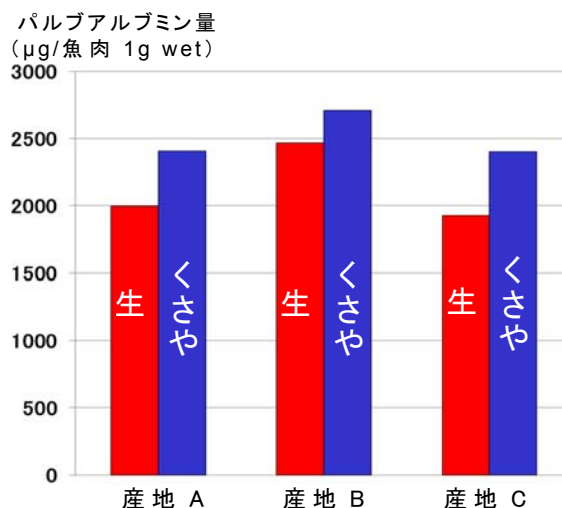


図3 ムロアジの生魚およびくさやに含まれるパルブアルブミン量

No. 8 『ニホンナシ新品種「凜夏・甘太」の特性』

～都内での導入が期待される食味に優れる早生・晩生品種～

河野 章（園芸技術科）

〔発表内容〕

2013年11月に品種登録出願公表された（独）農研機構果樹研究所育成ニホンナシ「凜夏」および「甘太」の，都内における品種特性を明らかにしました（図1）。「凜夏」は「幸水」より1週間早い8月中旬収穫で，花芽が安定して着生する早生品種。平均重は421gと大きく，果皮の仕上がり，揃いが良く，食感は酸味があり（pH 4.7），食味良好です。果肉には，わずかにみつ症が発生します。「甘太」は「新高」よりやや遅い9月下旬収穫の晩生品種で，花芽の着生・維持が容易です。平均重は624gで糖度が高く（14.2%），酸味があり（pH 4.7），肉質軟らかく食味に優れます。なお，果面にさびが発生することから，有袋栽培が望ましいです（表1）。いずれの品種も果実品質が優れることから，都内での導入が期待されます。

〔図表等〕

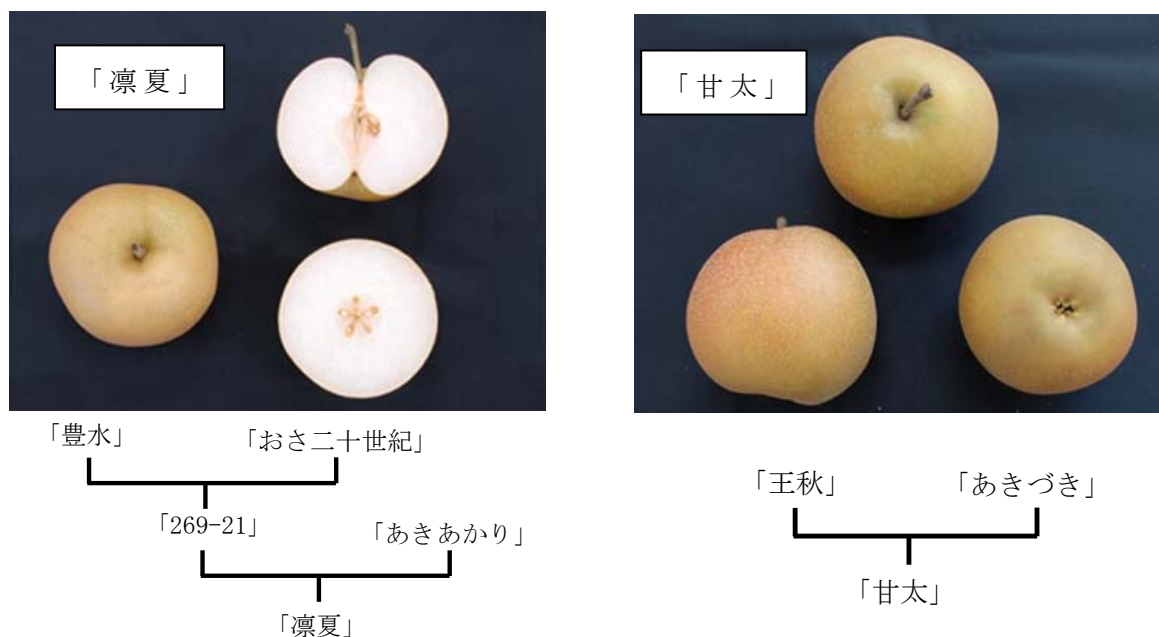


図1 「凜夏」および「甘太」の果実と育成経過
（写真：（独）農研機構果樹研究所）

表1 各品種の結実性および果実特性

	短果枝 の着生 ^a	えき花芽 の着生 ^a	収穫期 ^b （月/日）		平均重 ^b （g）	揃い ^a	さび ^a	糖度 ^b （Brix %）	pH ^b	みつ症
			始	終						
凜夏	中	中	8/11	8/24	412	良	なし	11.9	4.7	やや有
甘太	多	多	9/29	10/15	624	中	有	14.2	4.7	なし
幸水	少	中	8/18	9/2	379	中	なし	12.2	5.2	なし
豊水	中	多	9/2	9/20	466	良	なし	12.8	4.6	有
新高	多	中	9/26	10/13	749	中	なし	13.6	5.0	有

a) 2012年

b) 平年値（2009～2013年）

No. 9 『東京都の野菜畑土壌の実態』

～土壌の理化学的性質の経年変化～

松浦里江（生産環境科）

〔発表内容〕

環境保全型農業を推進するため、過剰施肥による肥料成分の流亡を抑え、土壌の特性にあった適切で効率的な管理が求められています。このため土壌の養分状態などを常に把握することが必要です。そこで、定点を設け 1979 年から 5 年間隔で農耕地土壌の概況を定期的に調査し、適切な土壌管理の指導や推進に役立てています。ここでは東京の主要な土壌である黒ボク土（図 1）の野菜畑の状況を示しました。

作土の深さは 4 巡目（1994～1998 年）以降年々浅くなる傾向がみられます（図表略）。これは乗用トラクターの普及で耕耘が容易となり、過度な耕耘が一因と考えられます。土壌 pH は良好からやや高い範囲に大多数が分布し、上昇傾向にあります（図表略）。可給態リン酸は増加傾向にあり、一部では過剰に蓄積しています（図 2）。pH の上昇や一部の肥料成分の増加の要因は化学肥料だけでなく有機物施用の影響も考えられます。堆肥などの有機物からの肥料分を加味した施肥量や施肥法の見直しなどの対策をとる必要があります。

〔図表等〕

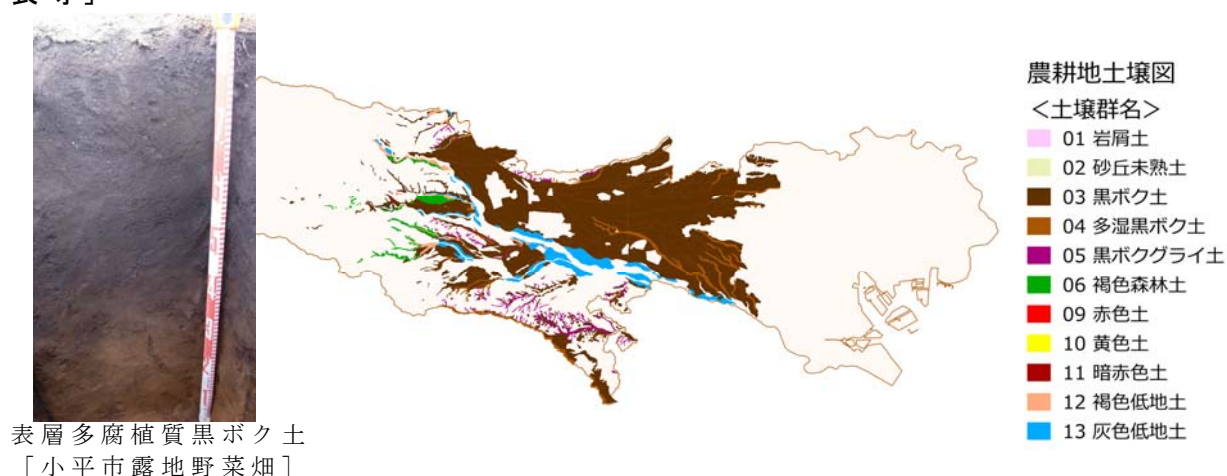


図 1 東京都多摩地域の土壌図と代表的な土壌断面

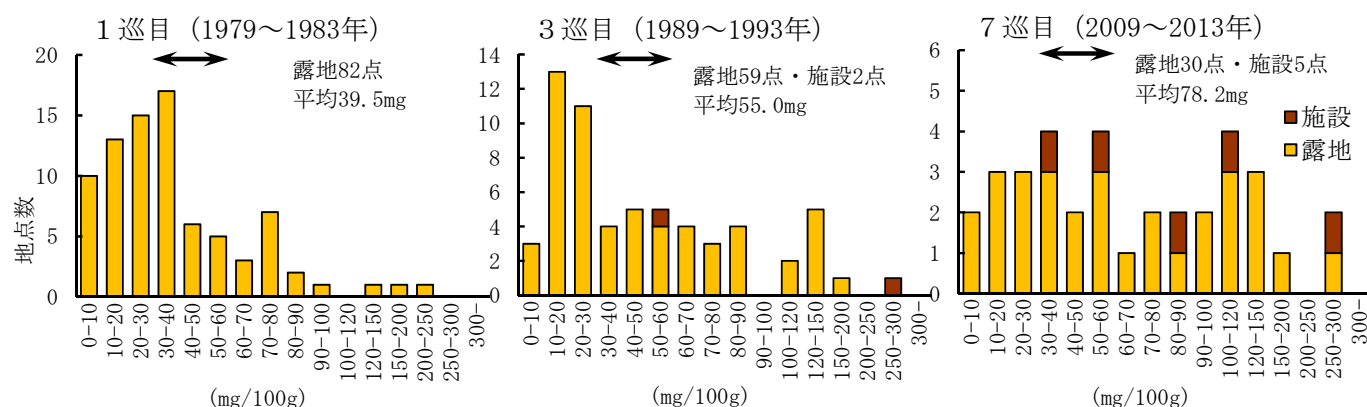


図 2 東京都内黒ボク土野菜畑の可給態リン酸の分布の推移

（図中の矢印は適正域）

No. 10 『野菜の有望品種を紹介します』

～キャベツ、ブロッコリー、ダイコン、トマトのおすすめ品種～

沼尻勝人・野口 貴・海保富士男（園芸技術科）

〔発表内容〕

野菜を栽培する上で品種選定はきわめて重要です。品種が異なると収量性のほかに形状や食味など様々な形質が変わります。特性を正しく把握し目的に合った品種を選ぶことが大切です。今回は春まきキャベツ，夏まきブロッコリー，夏まきダイコン，雨よけおよび抑制トマトについておすすめ品種を紹介します。

① キャベツの2月中旬まきでセル育苗した場合，「さつき女王，初恋，きよはる」は生育が早く5月どりが可能です。これらの品種は結球の揃いが良く，高温乾燥でも腰高になりにくく形状が安定しており有望です（図1）。

② 夏まきブロッコリーでは「ジェットドーム，まどか」が10月上中旬から取れ始め，花蕾のボリュームや品質に優れます（図2）。10月下旬から12月までは有望な品種が多くみられるので，品種選定の幅が広がります。

③ 8月下旬まきのダイコンでは「AD-325，夏皇，献夏37号」がよく揃い，根部の毛穴が浅く肌のキメなどで優れており，こぶ症や内部褐変症といった高温時の障害が少ないといった特徴もみられます（図3）。

④ トマトの黄化葉巻病抵抗性品種は，雨よけと抑制栽培の両作型で「TY-12」の収量性が高く有望です。また，ホルモン処理を必要とせず自然着果する為結果性品種「パルト」は省力化栽培におすすめです（図4）。

〔図表等〕



図1 春まきキャベツ有望品種

「さつき女王」は揃いよく，形状が安定し，腐敗や裂球しにくいことから5～6月どりに最適。



図2 夏まきブロッコリー有望品種

「ジェットドーム」は早どりに適する。



図3 夏まきダイコン有望品種

「夏皇」は揃いや肌質に優れ，内部品質もよい。



図4 雨よけ栽培でのトマト有望品種

黄化葉巻病抵抗性なら「TY-12」が高収量．
ホルモン処理を省ける「桃太郎パルト」は省力的．

No. 11 『コマツナに発生するリゾクトニア病』

～孢子による急速な発生拡大の可能性～

菅原優司（生産環境科）

〔発表内容〕

コマツナは江戸東京の伝統野菜であり、全国各地で生産されるようになりましたが今でも作付面積、収穫量ともに全国2位と東京農業の主力野菜です（平成24年調べ、469ha、7790t）。ところが近年、コマツナでリゾクトニア病といわれる「尻腐れ症状」（図1）の被害が顕著になってきています。病原菌は通常孢子を作らず、ゆっくりと土壌伝染しますが、今回、コマツナ上に孢子を作ることを見しました（図2）。孢子を作ると空気伝染が可能になり、急速に被害が拡大する恐れがあります。孢子を作る条件についてはまだ解明されていませんが、幸いなことに、今のところ生産現場では孢子による伝染は確認されていません。しかし、油断は禁物です。ところで、この病害については使用できる農薬が無かったことから、メーカーと共同で農薬登録適用拡大に向けた試験研究を進め、近々適用拡大される予定です。

今後は、孢子の作られる条件を解明するとともに防除体系を構築していきます。同時に、生産圃場での調査を行いながら発生を調査・警戒し、情報を提供していきます。

〔図表等〕



図1 コマツナリゾクトニア病（しり腐れ症状）



図2 コマツナ上に見られる孢子を作る器官

No. 12 『切り花パンジーとは』

～江東地域から新しい春の切り花品目を提案します～

上原恵美（江戸川分場）

〔発表内容〕

冬から春の花壇を彩るパンジーの活用法を検討する一環として、遺伝的に高性能なパンジーを導入し、切り花としての利用を試みました。切り花パンジーの栽培方法は不明で、伸張する枝の整理方法や適正な管理方法については検討中です。一つの試みとして江戸川管内のアサガオ栽培で使用する行灯を活用して栽培したところ、作業性が改善しました。切り花パンジーは、低温で簡易的な施設で栽培でき、女性や高齢者でも栽培しやすい品目です。花持ちも非常に良く、1～4月期の品目拡大が図れます。さらに全国的にも流通量が少ないため、市場で高単価が期待できます。高性能パンジーの切り花は、切り花長が30～40 cm確保できるため、今まで切り花長の短いパンジーではできなかった他の花との組み合わせが可能で、新たなアレンジメントへの活用が広がります。江戸川管内生産者も今年から試作を開始しています。

〔図表等〕



図1 行灯を使った切り花パンジー栽培



図2 切り花パンジー



図3 作業風景



図4 切り花パンジーを使ったアレンジメントの例